

統合医療における免疫

西原 克成*
にしはら かつなり

- 「自己・非自己」の免疫学は、おもに移植免疫学を扱うもので、免疫病とはほとんど無縁の学問である。
- 多細胞生命体は、ミトコンドリアのエネルギー代謝で生命活動が支えられている。
- 口呼吸と腸の冷えて腸内の常在菌が血液（顆粒球）を介して体中に播種されると種々の器官・臓器・組織の細胞内感染症を発症する。
- 体外からのエネルギーや、細胞内感染症により、各器官・臓器・組織の細胞内の糸粒体の働きが荒廃し、細胞機能が低下した状態が「わけの解らない免疫病」の本態である。
- 呼吸を正し身体の冷却を改め、正咀嚼により腸内細菌の細胞内感染症を防止すれば免疫病の予防と治療が可能である。

Key Words

わけの解らない免疫病、ミトコンドリア（糸粒体）の荒廃、細胞内感染症、自己・非自己の免疫学、ヒドロキシアパタイト、生命統御の情報系

免疫とは、疫病にかからないことであるから、「免疫学」とは、疫病を免れるための体のしくみを研究する学問である。今日、病原性微生物による疫病を人類は克服してすでに久しいのであるが、文明国においては依然としてわけの解らない免疫病が多発しておりその本態も不明のままである。したがって、現代の免疫学とは「わけの解らない免疫病の原因究明と免疫病にならないための体のしくみの研究」である。今日「自己・非自己の免疫学」が風靡しているために、免疫病がわけの解らない疾病となっている。基督教文明では、質量のないエネルギーが無視されており、エネルギーで病気が起きることが忘れられ、「わけの解らない免疫病」はすべて原因不明とされ対症療法に終始している。統合医療における免疫学は、当然病気を治すことのできるものでなければならない。この疾病の原因をすべての伝統的英知と技術を統合し、エネルギーをも含めて正しく究明し、免疫病の根治療法を樹立することが急務である。それには生命とは何か、動物とは何か、脊椎動物とは何か、哺乳動物とは何か、を定義し研究し、そのうえで病気とは何か、健康とは何か、を定義しなければならない。今日のライフサイエンスでは、

これらの重要な定義が一切なしに研究が続けられてきたのである。幸いなことに私の研究テーマは脊椎動物の進化の法則性の解明と免疫病の原因の究明と多細胞動物の生命統御のしくみを細胞内小生命体のミトコンドリア（糸粒体）で解くというものである。ここにその研究経過の概略を示し、これらをまとめて新しい免疫学について述べる。

□ 多細胞生命、脊椎動物、哺乳動物の特徴

動物の特徴は、動くことである。体を移動させる動きには絶大なエネルギーを要する。このエネルギーをまかなうのが細胞呼吸の小器官の糸粒体である。生きるとは呼吸をすることで、生命とは糸粒体によるエネルギーの渦の回転とともに起こる細胞や個体の再生（リモデリング）のシステムである。これによりエイジング（老化）が克服される。エネルギーの渦が止まると、体温と魂が消失し亡き骸となるから、細胞内の糸粒体が生命の根源である。

脊椎動物は「骨化の程度にかかわりなく、骨性の楯鱗（菌の原器）と脊柱を持つ脊索動物で、特徴器官が腸管呼吸と腸管造血を行う」動物種である。哺乳動物に至り、授乳のシステムを持って生

*西原研究所

まれ、成体になると腸管造血系の一部が関節骨髄腔系に移る。ヒトの60兆個の細胞内に数百数千個ずつ存在する糸粒体の細胞内呼吸と、水・酸素・栄養・黴菌・毒物など腸管の物質吸収系との仲を取り結ぶのが心臓・脈管・血液系で、その源が骨髄造血系である。外呼吸系と糸粒体の内呼吸系をホルモン・サイトカイン・生長因子で直接血流を介して制御するのが、口蓋のラトウケ嚢から発生する下垂体前葉であるから、口腔が糸粒体の細胞内呼吸の制御に直結した生命の最重要器官である。以上のことから、細胞内呼吸の糸粒体と外呼吸の腸管物質吸収系と、その仲立ちをする血液循環・骨髄造血系の三者を、脊椎動物を決める歯と骨の鉱物質の合成ヒドロキシアパタイト（アパタイト）で解けば脊椎動物のすべての謎が一気に解けるのである。

□ 新しい免疫学樹立の研究経過

1. 糸粒体の突然変異の原因究明に関する研究

研究の第一歩となる私の学位論文のテーマが「糸粒体の変異発生の原因究明に関する分子生物学」である。この背景には、癌におかされた細胞に見られる糸粒体の形の変異がある。この研究で、真核生物の蛋白質合成系を阻害すると高率に糸粒体の変異が発生することを発見した。糸粒体の遺伝子を複製する糸粒体DNAポリメラーゼが核の遺伝子に支配され、これが合成阻害されて糸粒体が突然変異することをつきとめた。

アパタイトが合成された時に釘植型の人工歯根と人工骨髄の開発研究に着手し、これに成功した。アパタイト人工骨格に、生理的「動き」のエネルギーを負荷すると、アパタイトの物性とエネルギーとの複合作用で、未分化間葉細胞の核と糸粒体の遺伝子の引き金が引かれて、アパタイト表面に造血細胞と共役した骨芽細胞やセメント芽細胞が誘導される。生体力学エネルギーが流動電位に変換され、この電位とアパタイトの生物活性作用が触媒作用としてステムセルの遺伝子発現を誘導することを示した。生命体にとって質量のある物質も、エネルギーも等価であり、ともに遺伝子発現を誘導し細胞が変容（化生）するのである。

これにより進化と免疫系と多細胞動物の個体制御のシステムの謎の主要部を明らかにした。

2. 多細胞生命体統制の情報システム

以上の視点から多細胞の生命個体を統御する情報系を5つにまとめた。①細胞情報系の遺伝子情報システムで、すべての代謝と蛋白質合成とおびただしい数の代謝マップによる細胞内活動のすべての情報を制御し、日々1兆個の細胞の再生と世代交代の再生を行う。②神経系情報伝達システムの神経—筋肉情報系で、この窓口は感覚器官を主体とする体壁筋肉システムである。筋肉を動かして身体を制御する。③内臓腸管筋肉系の呼吸・栄養吸収系すなわち物質情報系である。④これらの情報系のすべての仲立ちをするのが血液リンパ系の脈管心臓血液情報系のサイトカイン・ホルモン情報系で、60兆個の細胞を直接制御する。⑤エネルギー情報系、温熱・寒冷エネルギー、光・音波・超音波、体液の流動で生ずる流動電流、放射能などは、細胞内の糸粒体に直接作用し、その働きを障害したり助長する。重力作用下における動物自体の長期反復運動は、細胞の再生時に作用して時間の経過とともに形態が変わる。これらの情報系の作動にもすべて核と糸粒体の遺伝子発現とエネルギー代謝が必須である。

3. わけの解らない免疫病の原因究明と新しい免疫学

動物の個体を統御する情報システムの観点から「わけの解らない免疫病」をくわしく観察したところ、今日世界中の文明国で困っている「自己免疫疾患」と呼ばれる「免疫病」がじつは40年～50年前には軽症例では、成人で「日和見感染症」子供では「自家中毒」と呼ばれていた疾患で、重症ではサルコイドーシス、組織肉芽腫症、顆粒球症、ヒステリオサイトーシスX、リンパ肉芽腫症と称される転移する感染症の疾患群と同じものであることを最近私が明らかにした。哺乳動物は体温が下がると白血球がおびただしい数の細菌やウイルスを抱えて体中をめぐり、組織内に播種して細胞内感染症を引き起こす。身体が冷えた時に自分の口や鼻や喉や腸や腔内の無害の常在性のウイルスや黴菌がパイエル板のM細胞から白血球（顆粒球）に取り込まれて血中を巡り、これらが

運び屋となって細菌をいたるところにばらまいて、さまざまな器官や組織の細胞群に細胞内感染症を発症することによって起こるのがこれらの疾患である。どこの器官や臓器の細胞群に感染が起こるかで免疫病の病名が決まる。これが経済発展による文明化で生活様式の激変のために劇症化したものである。糖尿病、心筋症、肝炎、間質性肺炎、うつ病、てんかん、リウマチ、喘息、痛風、SLE、アトピー性皮膚炎、緑内障、散瞳、網膜症、動脈硬化症、レーノー症、脳血管障害はそれぞれの組織・器官部の細胞内におびただしい数にのぼる腸内微生物の細胞内感染症によって発症する。今日まで腸内の細菌が顆粒球によって播種されることを完璧に見落としていたのである。免疫病患者の血液や尿の沈渣をモニターで3000倍で観察すれば、泳いでいる細菌が菌垢と同様に観察される。また、白血球を採取して、電子顕微鏡で観察すれば、一目瞭然である。これらの疾患は腸内細菌が血中に入るのを防止し、ビフィズス因子で腸を整えることにより治療が可能である。

従来常在性の腸内細菌で起きる疾患を原因不明のアレルギー性疾患としたところに重大な誤りがあった。抗生物質とステロイド療法と分子生物学の発展下で糸粒体の細胞呼吸を失念したための誤りである。

糸粒体は真核生物の細胞内に寄生した好気性菌と考えられ、独自の遺伝子と蛋白質合成系を持ち、その働きには温度依存性があり、外からのエネルギーを直接受けて弱ったり強化したりする。高等生命体は糸粒体の働きが止まった時に生命が終わる。糸粒体を深く研究し、演繹法と帰納法と数学の逆計算法を活用すれば60兆個の身体全体の細胞を制御しているのが、極微小のホムンクルス(小人)のごとき糸粒体であることがわかる。こうして「免疫病」が無害の腸内細菌やウイルスの単なる細胞内感染症によって糸粒体が荒廃し細胞内に炎症が発症し細胞機能が劣化した病態であることを示した。

□ 健康と病気の定義と

免疫病の治療法・予防法

ここで漸くにして健康と病気を定義することが



ミトコンドリア博士



ミトコンドリア免疫病治療法

できるのである。ヒトの健康とは、細胞レベルで見ると60兆個のすべての細胞内に障害となる寄生微生物の活動が見られず、温熱・寒冷エネルギーで障害されず、糸粒体が生き生きと息づいた状態を言う。免疫病とは、不適当なエネルギーで糸粒体が障害されたり、ある条件下で腸内の常在性微生物が白血球を介して全身に播種され種々の組織・器官の細胞内に多数のウイルスや細菌の細胞内感染症を起こし、糸粒体が荒廃し臓器や器官や組織細胞が機能障害に陥って、その結果身体機能が低下している状態を言う。

人類は言語を習得し、直立二足歩行による行動様式により一般の哺乳動物から並外れて特異な方向に生体力学的に進化している。そのために身体に哺乳動物としては存在してはならない身体構造上の弱点を持つ。これらがしゃべることと口呼吸と立位、座位による骨休め不足と、文明化による冷中毒が著しい。これらのためにヒトは文明生活で容易に細胞内感染を発症する。細胞内感染症を防止し、糸粒体を活性化することにより細胞のリモデリングをうながし、免疫病を予防し克服する治療法「ミトコンドリア免疫病治療法®」を確立した。ミトコンドリアのための八つの正しい生活習慣—ミトコンドリア博士の八正道—①口呼吸せずに、鼻呼吸の徹底、②冷中毒を改める、③咀嚼の励行、④正しい姿勢保持(睡眠・立位・座位・正座)、⑤十分な骨休めと正しい思考、⑥呼吸体操の励行、⑦正しい排泄、⑧太陽光を受ける、を身につければ免疫病の予防と治療が可能となる。

文 献

- 1) Nishihara K: Verification of use and disuse theory of

- Lamarck in vertebrates using biomaterials. *Biogenic Amines* 18(1) : 1-17, 2003
- 2) Nishihara K : Research on the evolution and development of autonomic system. *Biogenic Amines* 18(2) : 95-106, 2004
 - 3) Nishihara K : Establishment of a new concept of the immune system, disclosure of causes, and development of the therapeutic system of immune diseases. *Biogenic Amines* 18(2) : 79-93, 2004
 - 4) Nishihara K : Trilateral research on neural system and biogenic amines : Disclosure of the major causes and mechanisms of human characteristic neurocerebro-muscular (psychosomatic) disorders. *Biogenic Amines* 19(3) : 197-208, 2005
 - 5) Nishihara K : Disclosure of mechanisms of the mammalian life system and Selye's Stress Theory. *Biogenic Amines* 20(5-6) : 171-184, 2006
 - 6) Nishihara K : Disclosure of causes of human-specific intractable immune diseases—Mitochondrial deterioration due to intracellular infections—. *Biogenic Amines* 21(1-2) : 23-41, 2007
 - 7) Nishihara K : Disclosure of causes of human-specific intractable immune diseases by means of bio-energy resonance—Detection of mitochondrial deterioration due to intracellular infections using Bi-Digital O-Ring Test—. Faenza, Italy, 2007 (in print)
 - 8) Nishihara K : Development of therapeutics for human-specific intractable immune diseases by means of bio-energy resonance—Remedy of Mitochondrial deterioration due to intracellular infections using Bi-Digital O-Ring Test—. *Biogenic Amines* 22(1-2) : 75-84, 2008
 - 9) Nishihara K : Disclosure of Major Causes of Mitochondrial Mutation by means of Molecular Biology. *Biogenic Amines*, 2008 (in print)
 - 10) 西原克成著：内臓が生み出す心，NHK出版，東京，2002
 - 11) 西原克成著：免疫・生命の渦，哲学書房，東京，2003
 - 12) 西原克成著：究極の免疫力，講談社インターナショナル，東京，2004
 - 13) 西原克成著：免疫力を高める生活，サンマーク出版，東京，2006
 - 14) 西原克成著：これだけで病気にならない，祥伝社，東京，2007
 - 15) 西原克成著：歯はヒトの魂である，青灯社，東京，2006
 - 16) 西原克成著：6つの生活習慣でガン・難病を治す，ビジネス社，東京，2008
 - 17) 西原克成著：「呼吸力」で病気に強くなる，イースト・プレス社，東京，2008